人殺しって呼ばないで！（仮）

木瀬暦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人殺しって呼ばないで！（仮）

【Ｎコード】
Ｎ８９９７Ｙ

【作者名】
木瀬暦

【あらすじ】
舞台はどこか別の世界。
濡れ衣を着せられ人殺しと呼ばれた少年の物語。
「本当に嫌になっちゃうよねー」

（注）試験勉強する気が無くなった作者の暇つぶしの作品です。更新出来ていくかわからないしこの作品が処女作なのでもう文とか無茶苦茶です。

それでも仕方がないから、暇だからというそこのあなた！
どうか読んでいってあげてくださいｏｒｚ

因みにタイトルが（仮）なのは友人が考えたからです。やっぱり処女作のタイトルは自分で考えたいのです。

第1話〜看守と人殺し〜

何故こうなった…？
と、暗く冷たい檻の中で考えてみる俺。

もう何度目だろう、あの日のことを考えるのは？

「…はあ……」

ああ思い出しただけですぐに溜め息が出る。
もうこれで何回目になるかわからない。
よくさ、溜め息をつくと幸せが逃げるよって言われない？
まあ俺はよく言われること何だけどさ？
そのたびに思う訳よ、俺は溜め息で逃げるような幸せが欲しい訳じゃないんだ！って。

でも今こんな所でさこうやって愚痴ってる俺って結構不幸だよね？
ああ不幸、不幸。
そのことを考えると本当に溜め息って良くないのかもね？

だがしかし勝手に出てしまう溜め息。
それに伴う幸せの逃亡と不幸の来訪。
悪循環って奴？
っかあ〜やだやだ。まあ悪循環って言葉自体は嫌いじゃないんだけどね？

…え？そんな事は聞いてない？
あら、案外冷たい。
いいじゃないそんな顔しないでよ。

…まあ、顔なんて見えないけど。
あれ？ちょっとイラってきた？
いいじゃない俺と君の仲だろう？

え？どんな仲だって　？
そりゃあアレじゃない？
やっぱり……

看守と犯罪者？

第2話～回想～

～3日前～

故国であるアミタ王国を抜けて旅に出てもう5年になる。
ああ、色んなことがあったなあと思い出を懐かしみながら旅を続ける。

昨夜泊めてくれたシシトコ村という小さい村に住んでいるお婆ちゃんとお爺ちゃんに朝お礼を言って旅を再会してからもうだいぶ時間が経つ。
陽が高く登りもう昼かという時分にとても大きな門が遠くに見えた。

「あはは、やっと休めるね。もうお腹ペコペコだよ」

と独り言を言う俺。
地図によるとアソコはラクト王国という国らしい。
自分の国も大きい方だがそこは自分の国より大分大きい。

ワクワクしながらスキップで向かっていると（何故か通りすがりの商人に笑われた）意外にすぐにたどり着いた。

うわ、すごい人。

「こんにちは！いい天気ッスねオジサン！」

機嫌がいい俺は門番のオジサンに挨拶をしてみる。

「誰がオジサンだ！俺はまだ25だ！」

怒られた。

「ご、ごめん。門番の人。俺旅の者なんだ。観光したいから中に入れてよ」

「入国証を見せろ」

「に、入国証？」

「なんだ、もってねーのか？じゃあ駄目だな、出直してきな」

落胆した。俺はもう美味しいご飯を食べる気満々だった。宿屋のふかふかのベッドで寝る気満々だった。

…もう今更野宿する気にはなれない。

「…ねえ、門番の人？」

「ん？何だ？入国証持ってない奴は入れねーぞ」

「あっ！何だアレ！？」

「何だ？っておい！」

まさか本当にこんな手に引っかかるとは…大丈夫かなこの国の警備は。

「おい誰か、そこの男捕まえてくれ！不法入国者だ！」

……え？

「やばっ！早く逃げないと！」

それから俺はもう持てる力を全て出し切っての猛ダッシュ。

かくして俺は入国に成功（？）した。

第3話〜事件〜

不法入国から数十分後。

「やっと逃げ切れたけど…」

もうこれじゃどこの宿屋でも泊まれないし料亭にも入れないだろうな。

多分入った瞬間通報だよ…

さてこれからどうしようか？

一応武器は持ってるから追いつめられても何とかなるだろう。

でも出来るならばなるべく気づかれないうちに早く出国したい。

難しいけど路地裏とかを通っていけば何とか…。

と、思って今いるゴミ箱の中から出てこっそりすぐそばの路地に入ろうとした。

「居たぞ！！」

瞬間気づかれた。

「早く逃げないとっ…！？」

別に路地裏が行き止まりだったから驚いた訳じゃない。

そこにあったのは…。

死体。十数人ほどだろうか？沢山の兵士、中には要人らしき人もいたが…。
皆同じように切り刻まれて死んでいた。

「……は？」

「おい！こっちだ！こっちに入ったぞ！早く……うわあああぁぁ！？」

「おい！どうした！？大丈夫か！？」

「なっ、何だこれは！？貴様何てことを！」

「ち、違う！俺じゃない！」

マズい、人が集まり始めた…仕方ない…。

「よっと」

「跳んだ！？なんて跳躍力だ」

「感心してる場合か！さっさと捕まえるぞ！」

ヤバい、ヤバい！不法入国者どころか大量殺人犯になっちゃったよ！？

店の屋根の上を跳びながら逃げていた俺はかなり焦っていた。

「残念ながら貴様はここまでだ」

だから上から降ってくる大きな火の玉にも気づかなかった。

俺が覚えているのはここまでかな。

第４話～捕らわれの身～

「…そうして今に至るわけさ。わかってくれた？」

「いや、もう凄く嘘っぽい」

「いやいや、証拠もないのにこの扱いは酷いよ…」

「だって剣持ってたじゃないか」

ん？

「あのさ、看守さん？何で俺が剣持ってたって知ってるの？後何故か看守さんの声俺があの時最後に聞いたあの声に似てるんだけど？」

「私は看守ではないのだが…まあ貴様の質問に答えるとあの時魔法を放ってお前を捕らえたのは私だ。ああ、心配するな。剣ならちゃんと拾っておいた。まあここから出られるかどうかもわからんがな」

やっぱりあんたか！って、

「え？俺出られないの？」

「そりゃあそうだろう。不法入国したうえに兵士十数人に国の宰相一人殺しているんだ、恐らく死刑は免れないだろうな」

「え、マジで！？違うんだよ本当に俺じゃないんだって！」

「諦めろ、ここはＡ級犯罪者が収容されている施設だ。ガードも固

いから脱獄も不可能だ」

「いや、まあ剣さえあったら脱獄なんて簡単だけどね」

「ふふん、面白い冗談じゃないか」

別に冗談じゃないんだけど…。

「いや、ホントだって」

「ふん、戯れ言を」

「出来るってばー」

「（……プチッ）」

…プチッ？

「よーし、よくわかった！そこまで言うならやってもらおうじゃないか！ほら！お前の剣だ！！返してやるからやってみろっ！！！」

うわあああ！？怒ったよこの人！？何で怒ってんの！？

「ちょっと落ち着いてよ、何で怒ってるのさ！？」

「うるさい！これが怒らずにいられるか！！」

えー…どこの部分で怒ったのこの人？

（ガチャリ）

ん？誰か来た？

「ここにいたか。第三軍大将、イズミ・ハヤセ」

ええっ！？看守さんは看守さんじゃなかったの！？

「誰だ貴様は？」

「…ふん。言葉遣いがなっていないようだな。まあいい、イズミ・ハヤセ、貴様は反逆罪で明日には処刑だ。私は貴様の後釜、ここを管理する権利と第三軍大将の地位は本日を持って私が受け持つことになった」

……。

「な、何！？そんな馬鹿な！」

「ふん、何を白々しい、宰相を殺しておいてよくもそんな演技が…」

「ち、違う！それはこの不法入国者が…！」

「ああ、そうだな。君、無罪だよ。おい、お前、釈放してやれ」

「ハッ！」

「あー、どーもー」

「イズミ・ハヤセ、貴様は明日までここで拘束する。朝が来たら処

刑だ」

「くそっ！どうなっている…！？」

「ああ、顔もよく見えないがそこの君、私はもう行くからね、好きに出て行ってくれてかまわないよ」

「了解しました将軍殿ー」

俺はもう閉まった扉に小さくそう呟いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8997y/

人殺しって呼ばないで！（仮）

2011年11月27日21時50分発行